『こころ』の与えた心

Junko Higasa

大葬の日の乃木希典殉死に世の中は騒然とした。人生経験の浅い若者の間では、自らの思想なしに感化されて死を選ぶ者、殉死を新時代に相応しくないこととして批判する者が出た。漱石はいち早くその風潮を読み取り、「先生の遺書」で、世間からの圧迫と賞賛を受けながら死ぬ機会を待っていた乃木さんにとって『生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方(どっち)が苦しいだろうと考えました』と読者の思考を促そうとした。しかし「時代や個性の相違」という感覚に到達させるための叙述を進めて行くうちに、短編では不十分であることに気付き、当初の方針を変更して『こころ』を長編に切り替えたのである。

『私は殉死という言葉を殆ど忘れていました』という言葉に表されるように、「殉死」自体が過去のものになったことは否めない。しかし流行的信仰や批判によって、乃木の「一個の人間として貫いた生き方」という「独立」までもが過去のものとして扱われかねない。「独立した個性」自体は決して過去のものではなく、自分自身の幸福を作る要素であると同時に国家の未来を形成する要素でもある。漱石は未来を作る若者の中で拡大する「過度な模倣の流行による圧迫」を食い止め、自他共存への理解を深めるために、「私」という未発達な個性に「先生」という憧れの対象を持たせる中で、時代と個性の相違を対峙させつつ「独立精神」の発現を促したのである。

『こころ』執筆後、漱石は自分が勤めたかもしれない、乃木が院長を務めた学習院で『私の個人主義』という講演を行った。その内容は「他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」という「個人主義」だった。それは時に人間同士がばらばらになるという淋しさを伴うが、自身の不愉快を解消して幸福へ向かう道であると同時に、国家にも尽す結果を導く。ここで他を認める重要性を述べた漱石は、次に自分が生徒と教師として籍を置いた第一高等学校で『模倣と独立』という講演をする。

その中で漱石は『人間という者は人の真似をするように出来ている情けないものであります』と述べた。しかしイミテーション(模倣)の部分は誰もが持っているもので、それを否定するわけではない。ただしインデペンデント(独立の)については、中途半端に弱いものは単なる自分勝手になりかねないので、強烈でなければならないという。そこで乃木大将に触れる。『乃木さんが死にましたろう。あの乃木さんの死というものは至誠より出でたものである。けれども一部には悪い結果が出た。それを真似して死ぬ奴が大変出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを真似する人が多いと思う。そういう奴が出たのは仮に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあっても、乃木さんの行為の至誠であるということはあなた方を感動せしめる。それが私には成功だと認められる』漱石は、乃木の殉死が形式ではなく、心に深く根差したものであったことを認識させることにより、過度のイミテーションと間違ったインデペンデンスの流れを変えようとした。

そろそろ西洋のイミテーションではない深い日本の背景を持つ独立精神が出てきてもよい頃だ。『こころ』で漱石が試みたのは、明治のインデペンデント精神の良き火種を抽出し、新時代のインデペンデンスの炎に引き継ぐことであった。　(2014.11.3)